
とある異聞と銃器製造(ガンメイカー)

電改突破

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある異聞と銃器製造^{ガンメイカー}

【Nコード】

N1999U

【作者名】

電改突破

【あらすじ】

PSYREN - 千夜煌貴 - の千夜煌貴と天墮雷峰がSIRENの世界へトリップしてしまい、その途中で天墮雷峰は命を落としてしまう。更に牧：宮田から奪った爆弾を使い、自らも命をたった。はずなのに、またしても転生を行う。行き先は「とある魔術の禁書目録」の世界。

異聞と禁書が交差する時、物語は始まる。

注意！ これは作者が「考えるな、感じる」の精神で書いているため、文章になっていないところも多々あるかもしれません。そうい

うのが嫌な方は直ちに戻るボタンを押しちゃって下さいな。

更に、唯の自己満足ですので、寛大な心で見守ってやって下さい。

7 / 18 追記 注意書き追加、及び小説タイトル変更、第一話前書き変更

10 / 6 追記 注意書き追加

シリーズを目指そうとした結果がこれだよ！（前書き）

あらすじにも書きましたが、他にも設定変更やら色々としてしまっているようなので、この小説での注意点をもう一度書きます。

- ・作者の「考えるな、感じる」精神でやってるので、文章になっていない箇所があります。
- ・色々本家の設定を弄ったりします。
- ・話の方向性が見えませぬ。
- ・描写が下手すぎます。

それでもいいですか？

よくないならば直ちにこれを読む事を中断して、ニコニコ動画へ飛ぶことをオススメします。

それでもいいよ！って人はどうぞクソ小説ですが読んでいって下さい。

では本編入りませう。

シリアスを目指そうとした結果がこれだよ！

千夜煌貴 第3日目 12:39:45

千夜「終わらせてやるよ、全部」

『ggYaoooooooooo!』

千夜「じゃあな」

『?、ああああ』

解放を求め、炎へ突き進んでいく者達。

これでいいのだろうか。

千夜「……孤独と言うのもいいか」

一人の男を思い出した。

天墮 雷峰。

千夜「俺は、どうしたらいいんだ？教えてくれよ……雷峰」

意を決し、炎へ向かう。

千夜「俺の命と引き換えだ」

謎の物体を懐から取り出し、炎の中へ投げ入れる。

そこで彼の意識は途絶えた。

シリウスを目指そうとした結果がこれだよ！（後書き）

SIREN本家の時間軸とは違います。千夜くんクオリティ流石。
一応、SDK≡千夜君なので焔薙（木の伝解放）、改造銃を持つての転生。

この小説は銃がメイン武器になりそうで怖い…。それではまた次回会いましょう。

（感想、意見、評価を戴けると嬉しいです。）

やってきました黄泉のくろ…あれ？（前書き）

書ける時は1日1話ペースでいきます。

やってきました黄泉のく…あれ？

川が流れている…

となるとここは三途の川って所か。

ん？誰かくるぞ？

？「ほら、さつさと金出しな」

ああ、そういえば三途の川を渡るには6文銭がいるんだっけ。

千夜「えーと…」

？「早くしてくれよ、私もそんなに暇じゃないんだ」

んー6文銭どころか財布すら無いとは…

探す事10分程、財布はなんかその辺に落ちてた。

そして俺は少女に尋ねた。

千夜「現代の金で払いたいんだが幾らだ？」

？「6万円」

嘘…だろ？

そんなに金持ってねえぞ。

？「ハハハッ、冗談冗談」

よ、よかった…

？「本当は600円だ」

千夜「はい」

600円を手渡す。

？「じゃあ、行きますかー」

そういえばこいつなんか見た事あるな…

まあ、いいか。

眠くなってきたし、寝かせて貰おう。

やってきました黄泉のくろ…あれ？（後書き）

話が急展開すぎるのは承知の上で読んで下さい。遅いか
次回はすぐ書けるかもしれませんが。

ロリ巨乳ってやじやろっやっばロリはロリ体形のままが一番だろ(前書き)

サブタイトルは気にしてはいけません。

ロリ巨乳ってどっしょっ、やっぱりロリはロリ体形のママが一番だろ

？「そろそろ起きて下さいー」

ん…もう着いたのか、早いな
そう思いつつも船から降りた。

？「ではこのまま直進して下さい。あ、絶対に後ろは振り向かない
で下さいね」

千夜「わかったよ」

俺は言われたとおりに直進して行く。

だが

千夜「なにか 建造物が あるようだ。」

千夜「千夜煌貴 は どうする？

コマンド？

入る

壊す

破壊する

誰か居ないか確認する

約束を破って後ろを向く

千夜煌貴 は 勇気を 振り絞って 後ろを 向いた！

そこにあつたのは…

同じ建造物。

千夜「入れて事ですね、わかります。」

取り合えず入らなければ何も始まりそうにないので、謎の建造物に入ってみる事にする。

ロリ巨乳ってどっしょっ? やっぱりロリはロリ体形のままが一番だろ(後書き)

これからの展開が楽しみですね。

ではここで一句

『また次回 お会いしましょう 後書きで
愚かなる民でござんした。』

貴方には関係ありません(前書き)

サブタイトルを気にしないで下さい…どうか気にしないで下さい。
大事な事なので2回言いました。

貴方には関係ありません

千夜煌貴が謎の建造物の中に入って数分後

? 「お、新人じゃないか、初仕事はちゃんとできたか？」

? 「は、はいっ！ちゃんとあそこの前に運びました！」

? 「え？確か第一法廷じゃなくて彼奴を連れて行くのは第二法廷のはず……」

? 「あ、間違えちゃった。てへぺろ？」

? 「そんなもんで許されるかぁー！さっさと連れ戻してきな！」

? 「は、はい！只今！」

? 「まったく、今回の新人はこの先不安だねえ……」

? 「……ですね……」

? 「……ど！……の……は……」

不意にどこかから話し声が聞こえてきた。

千夜「おお、ついに第一村（？）人発見か！？」

そのまま進んで行くと、ドアがあった。
どうやら話し声はここから聞こえてきてるようだ。

千夜「ヒヤッハー！汚物は消ど…く」
ドアを蹴破り中に入るとそこには…

？「どうしてここに煌貴が居るのですか？」

2人の美少女が居ましたとき。

千夜「えーき様じゃないか！と言う事はここは幻想郷か！久しいの
う久しいのう」

すると映姫と話していたらしい少女が声をかけてくる。

？「えーと、どちら様でせうか？」

む、上条語を使いこなすとは、此奴、中々の手だれ！

一筋縄ではいかなそうだな…

色々と思考を張り巡らせる。

すると

少女は俺に尋ねてきた。

？「いきなり険しい顔してどうしたんですか？」

俺はわかっている、これは罠だ！心配するフリをして俺を騙そうと
しているのか…だが、俺はそんなみえみえの罠にはひっかからんぞ！

映姫「これは天然の厨二病ですので御安心下さい」

？「そうなんですか」

いや、安心するなよ！

千夜「ふっ、貴様、中々やるようだのう」

？「えーと、貴方の名m…」

何か聞きたそうにしているが無視だ！

千夜「さあ、私と決闘デュエルしなさい！」

？「え、あの、だから名前を…」
千夜「デュエルスタンバイ！」

映姫「もうどうにでもなれ…」

貴方には関係ありません（後書き）

もう、やってしまった感が否めない…

取り合えず今日は禁書目録をようやく全巻買い揃えましたよ。

新訳のみ無かったんですけどw

それと、リア友も禁書の二次創作を書いているそうなので、負けられません。

取り合えず次々回はキャラ設定になると思います。

ではまた次回、Have a nice day。（意見、評価、感想等戴けると嬉しいです）

まさか一時間の苦勞が回線問題で水の泡になるとは思いもしなかったわ（前書き）
サブタイトルの事は本当です。
では本編始まります。

まさか一時間の苦勞が回線問題で水の泡になるとは思いもしなかったわ

映姫「ですから、貴方は…」

説教長えー！上条さんを超える説教屋がいたとはな。

映姫「聞いているのですか？」

それを聞くのは野暮ってもんだぜ。

千夜「まったく頭に入ってこないぜ綺羅星（くゝ・）」
見事な受け答えだろう？流石俺だ。

？「…クスツ」

こいつ、笑いやがった…だと！？

千夜「絶対に許さんぞ！俺をコケにしやがって！じわじわとなぶり殺しにしてくれるわ！」

どこかでこんな台詞あったよね。

映姫「何ソレ怖い」

イヤコワクナーイ

取り合えずあの少女に近づく。

千夜「さあ、抵抗しなければ直ぐに楽になるぜ」

？「え？私達まだ出会って間もないのに…そんな事……」

顔を赤らめているが、それより処刑だ、断罪だ！

映姫「煌貴はそういうのには疎いんですね」

千夜「ところでここは一体どこなんだ？」

俺は彼女に制裁を加えて一息ついてから映姫に尋ねる。

映姫「……ググレカス（ボソツ）」

映姫もそんな言葉知ってたのか。

千夜「まあいい、それよりも此処って天界に繋がってるか？」

映姫「ええ、一応ですが……ってどうするんですか？そんな事聞いてならばいい。

俺の能力『幽閉されし姫君』の能力を使えば天界など直ぐに行けるからな。

そうだ、彼奴も連れて行くか。

そして俺は部屋の端で昇天していた少女に声をかける。

千夜「えーと、まずお前の名前を教えてください」

？「……（ポー）」

ダメだ、使い物にならないな。

仕方無い、武力行使だ。

千夜「我が腕に宿りし獄炎よ！その形状を剣とし、光を断罪せよ！」
そして軽く殴る

？「（ポー）……ハッ！」

よし、これでの有名な「おれは しょうきに もどった！」の状態だな、まあアレは言った直ぐ後にまた洗脳されるんだが。取り合えず本来の目的を遂行するか。

千夜「えーと、お前の名前を教えてください」

？「わ、私は双月、双月・L・アリサよ」

なんか緋 の アの某Sランク武偵みたいな名前だな。

千夜「よし、ならばアリサ、俺と一緒に行くか？いやもう来い」
命令系になってしまったが問題ないだろう。

アリサ「どこに行くの？」

千夜「天界だ」

映姫「…（すやすや）」

仕事の疲れでもあったのだろうか、寝ちゃってるよ。
書き置きだけでも残して行くか。

よし、書けた！

アリサ「そういえばどうやって天界まで行くの？」

千夜「簡単な事さ、こっやっていくんだよ」

俺は元的能力『妄想を具現化する程度 of 能力』を使い、スキマを開く。

（ただこれの欠点は一度使うと一時的に能力が無くなるんだよな、

勿論程度の〜って方が)

アリサが俺に聞いてくる。

アリサ「こんな所通れるの？」

千夜「ただし、気をつけるよ、ここには胡散妖怪が住んでいて気が触れるとポツシュートンされるんだ」

アリサ「本当に大丈夫なの？」

千夜「多分大丈夫だ」

それじゃあ、行くか。

アリサ「ちよつと待って！そういえば貴方の名前を聞いてなかったのだけど…」

あ、忘れてたぜ！

千夜「我が名は暗黒の王セシルだ！」
適当に言ってみる。

アリサ「そう、よろしくね、セシルさん」

いやいや、どうして納得する！？

千夜「あ、いや、違うんだ」

アリサ「何が？」

あー、じれったい。

千夜「俺の本当の名前は千夜煌貴って言うんだ」

アリサ「本当に？」

アリサが上目遣いで聞いてくる。ちくせう、萌えたじゃねえか。

千夜「大丈夫だ、問題ない」

アリサ「ならいいんだけど、さあ、早く行こ？」

それじゃあ行くか。いざ、天界へ！

まさか一時間の苦勞が回線問題で水の泡になるとは思いもしなかったわ（後書き

今回は一度全部強制的に書き直せざるを得なかったのでかなり時間がかかりましたww

取り合えずオリヒロイン登場。

能力は次回のキャラ設定で明かされますので、楽しみに待っていて下さい！

それでは次回、また会いましょう！（感想、意見、評価等お待ちしております。）

キャラ設定（前書き）

くっ…飯を食ってから書こうと思っていたが、寝てしまったぞ
まあ、悔んでも仕方ないんで、本編——じゃなくて設定いきましょ
う！8 / 4 追記アリサの容姿とか追加8 / 5 追記色々と微調整

キャラ設定

オリキャラ設定

千夜煌貴

性別 男

歳 16

髪色 赤（本人曰く、返り血が浸透していき、染まったらしい）

瞳の色 黒

能力名『幽閉されし姫君』、『妄想を具現化する程度の能力』
『幽閉されし姫君』

説明

主に空間支配と考えて貰えばいいです。

一方通行にも勝る絶対隔離空間を自分に纏わせる事も可能。

残りは随時追加予定

『妄想を具現化する程度の能力』

説明

名前の通りです。

幽閉されし姫君の効力で、使用回数に制限がある。

使用武器

神刀 焰薙

説明

例の神殺し武器。

こいつは魔力、神力、妖力を創る事が出来る。

創られる量は少なく、外へ出やすいが幽閉されし姫君で、外へ出ないようにする事で蓄えておく事が出来る。

量こそ少ないが、濃縮されて創られるために、実際かなりの量が創れる。

木る伝解放時、蓄えてある力も解放する事で身体能力がかなり強化される。

ウィリアム（全開時）と対等（又はそれ以上）に渡り会える。

狙撃銃

説明

なんの変哲もない狙撃銃。

スナイパーライフルではなく、狙撃銃。

宇理炎

説明

神の武器。

元は神の炎から。
ウリエル

主人公により、術式を組み換えられ命と引き換えでなくても神の焰が出せるようになった。

ちなみに剣と盾、2セット持っている。

備考

剣術を得意としている。

焔薙（能力解放）と組み合わせれば殆どの敵に勝てるが、体に負荷がかかりすぎるために、一度解放を解くと、続けて1時間は使えない。

剣術においては、彼の祖父が抜刀術の師範代だったため、小さい頃から修行してきた。そのため、抜刀術を使えば、殆どの者は倒せる程度の実力。

また、ナイフの扱いにも長けており、投げナイフ一本で山にいた熊を全滅させた事もある。

恋愛には疎い。

双月・L・アリサ

性別 女

歳 16

髪色 青

瞳の色 黒

身長 150cm

髪型 セミロング

顔立ち 口リ顔

B 76 W 56 H 81

能力 銃火機を製造し、扱う程度の能力

キャラ設定（後書き）

今書いている時間がAM3:00…

こんな感じで学生続けられるかはわかりませんが、この「とある異聞と銃器製造」は続けていきたいと思えますw
ではまた次回！

いまじゃパワーをメテオに！（前書き）

もうサブタイトルが思いつかない…
では本編どうぞ。

いまじゃパワーをメテオに！

アリサ「それで、天界へ行ってどうするの？」
唐突に聞いてくる。

千夜「まあ、お前もこのまま次の命が貰えるのを待つのは嫌だろ？」
そう。

千夜「神を殺す」
アリサ「え？」

驚きを隠せないのも無理はない。

千夜「いける。この焔薙があれば——神を殺せる」
そう、断言してスキマから抜ける。

千夜「！？誰か来る！」
すぐさま近くの建物の影に隠れる。

？「あーあ、やっぱり見回りは暇だなー、絶対戦闘班の方がいい気がするんだけど……まあ、そんな事言っても無駄か」
こいつは使えるな。

千夜「なあ」
取り合えず声をかける。

？「ん？なんだお前」
千夜「用件だけ言う、神殺しに協力してくれ」

？「なに！？神殺しだと！」
あ、やっぱりマズったか？と思うが

？「是非とも協力させてくれ！」
以外と簡単だったな。

千夜「ありがたい、所で貴殿の名はなんと申す」
？「災灯 魔凜と言う」

千夜「色々突っ込みたい部分はあるが、作戦内容を説明する」
そして、ずっと建物の影にいたアリサを呼ぶ。

千夜「よし、じゃあ話すぜ」

作戦内容はとつてもシンプルなものだった。

？魔凜が神の元へ行く

？俺が狙撃銃で神を撃つ

？わざと外して、神を魔凜が誘導する

？そのポイントは予め設定してあるため、そのポイントで待つ

？神がやってきたら、焔薙で首を切り、殺す

終了。

千夜「では、作戦決行だ！」

いまじゃパワーをメテオに！（後書き）

はい、今回でアリスの能力を出そうと思ったのですが、次回へ回します。

そして今回も新キャラ追加！

後でキャラ設定に付け加えておきます。

ではまた次回お会いしましょう。

（感想、意見、評価、誤字脱字、矛盾点等お待ちしております！）

神殺し 神になる(前書き)

はい、今回はまともなサブタイトルです。

後、アリサの能力はキャラ設定に書き加えておきますので、そちらを見て下さい。

神殺し 神になる

千夜「さあ、楽しいshowの始まりだ！」
そっいいながら、目的のポイントまで移動する。

アリサ「でもこの距離から狙える狙撃銃なんてあるの？」

千夜「うーん、こいつは倍率が変わられないタイプの狙撃銃だから、確かにやりにくいな」

しばし考える。

千夜「じゃあ、手榴弾でも投げるか」

アリサ「それだと魔凜まで巻き添えになるわ」

千夜「不発弾ならいいんじゃないか？あいつなら不発でも上手く神を誘導出来ると思う」

そして、ポイントにつく

アリサ「だったら、早くしましょう」

千夜「ああ」

コンコン

魔凜「失礼します」

？「何の用だ」

魔凜「いえ、それよりもお耳に入れて貰いたい事が？」
「……なに！？^{オレ}私の命を狙う輩がいるだと！」

魔凜「ですので、お早めに避難をば」

？「だが、その確証はないのだろうか？」
魔凜「ですが――」
その時、突如部屋の中に閃光が走った。
？「閃光弾だと!？」
魔凜「こちらです!早く!」
そして目的のポイントへ誘導していく。

千夜「間違えて閃光弾投げちまったが、どうやら成功のようだな」
アリサ「後は例のポイントまで行くだけね」
それになりたいし千夜は
千夜「そうだな、だがその前にやる事がある」
アリサ「なに？」
いきなりアリサの胸をナイフで刺した。
アリサ「な、にを…」
千夜「ふん、上手く化けたつもりだろうが、俺にはわかるぜ」
更にナイフを奥へ刺しながら千夜は言った。
千夜「なあ、神様よオ」
神(?)「ククク――やはりこの程度の変装では貴様は欺けんか」
そついうと神は服をナイフごと脱いだ。
千夜「さあ、アリサを返して貰おうか」
焰難を構えつつ、神へ近づく。
神「あいつは我の嫁^{オレ}」
千夜「このロリコンがアアアアアア!」

千夜は出せるだけの力を拳に込めて、鉄拳を繰り出す。

神「そげぶ！」

ハアハアと息を荒げながら、神へ問う

千夜「アリサをどこへやった……」

その声には怒りが込められていた。

神「あいつは学園都市に送り込んでやった！へへ、貴様如きに渡す

位ならば、転生でもなんでもさせてや——グハア！」

今回ばかりは許せない。

神がこんな傲慢でよいのだろうか。

千夜「ハハ、ハハハハハハハハハハ！」

狂ったように笑う。

千夜「貴様には出来ない？だったら俺がテメエを殺して新世界の神になって、アリサを探しに行つてやるよ！」

そうして、神の体に焰薙を刺し、神力を吸い取る。

神「く、我の力^{オレ}が、抜けていく——」

千夜「……待つてるよ、アリサ」

神の力を全て吸い取り終わると、こう宣言する。

千夜「皆の者、よく聞け！私がムス……新たなる神だ！」

天使「え？つて事は……」

千夜「そうだ、あんな傲慢な神の元で働かなくともいいのだ！」

天使達「よっしゃー！新たなる神様バンザイ！」

千夜「新たなる神の名は、デイズルタ「クロウだ！」

天使達「クロウ様バンザイ！」

千夜「では、まずは城がいるな」

魔凜が近づいてくる。

千夜「どうした、魔凜」

魔凜「いや、城はもうあるんだが」

千夜「ふむ、だがかしかし！前の神の時代を終わらせ、新たなる時代へ進む為には新しい城が必要なのだ！」

天使達「では、早速取りかかせて戴きます！」

千夜「だが、決して無理はするな、お前らが過労死したら、元も子もないからな、休む時はきっちりと休めよ！」

千夜「——新たな時代の幕開けじゃあ！」

1000年後の世界(前書き)

ちよつと時間が出来たので更新。
たまには一日二回更新もありだと思つよ。

1000年後の世界

クロウ「…かなり発展したな」

魔凜「まあ、これもお前の隠されたカリスマ性のおかげだな」

そうは言っているが

クロウ「だが、これも我の計画の一部にすぎんのだ」
そういうと、ディゼルタ「クロウは宣言する。」

クロウ「お前ら、よく聞け！我は今から学園都市へ乗り込む」
天使達にどよめきが走る

クロウ「安心しろ、俺の代わりはいる」

そう言っつて魔凜を指差し

クロウ「これからは魔凜が指示を出せ」

魔凜「え？」

魔凜は状況が飲み込めていないようだ

クロウ「まあ、具体的には俺が学園都市からここへ指示を出す。それを魔凜が受け取り、お前らに同じ指示を出す。それだけだ」
そして

クロウ「そういえばまだこの名前を決めてなかったな」
うーむ、と顎に手をあてて考える。

クロウ「よし、ではここの名前は【バロン帝国】だ！」

そう言い残し、クロウは去って行った。

魔凜「行ったか」

天使A「どうするんだ？」

魔凜「まあ、次の指示を待つしかないだろう」

そういうと魔凜達は、自分の持ち場に戻って行く。

クロウ「……」

クロウはまだ迷っていた。

天界での時間は地上での時間の1/100000な為、地上ではまだ一ヶ月しかたっていない。

クロウ「行くか」

クロウは決心を固め、学園都市へ行く為の旅の扉へ入る

？「まちな！」

そういわれ、クロウは旅の扉へ進む足を止める

クロウ「誰だ？」

そこには、謎の2人組がいた。

？「俺はセリア」

？「私はスリア」

『なんだ、コイツらは』

セリア「まあ、待ってくれよ」

スリア「少し話があるの」

ふうん、と言い焔薙に手をかける。

セリア「ま、待て！落ち着け！よし、簡潔に述べるとだな」

スリア「アリサとやらは学園都市にて何かがあったみたいなの」

キツパリと言われ、少し戸惑う

クロウ「何があったんだ！」

セリア「い、いや、詳しい事は知らない」

スリア「自分で行って確かめる事ね」

そして、クロウは再び歩を進める。

一人の少女へ会う為に。

1000年後の世界（後書き）

ナンテコツタイノ（＾０＾）¥

ギャグが全然出ない…

学園都市で安定したら、いけそうな気がします。

ではこの辺でお別れとさせて戴きます。

コメントをいただくとテンションが上がります。

学校探して三千里歩くなんて事はない(前書き)

ようやくディゼルタックロウから千夜煌貴に戻ります。

戦闘の時はクロウ、普段は千夜ですので、バトル以外はかなりネタが混ぜられると思います。

そして、バトル描写が相変わらず終わってますが、本編をどうぞ！

学校探して三千里歩くなんて事はない

学園都市へ降り立ったクロウだったが
クロウ「くツ：やはりこの姿を保つのは無理——か」

仕方無く千夜煌貴（千年前）の姿に戻る。

千夜「取り合えず学園都市ってくらいだし、学校へ入らなくては！
取り合えず千夜は受け入れてくれそんな学校を見つけに、学園都市
を歩き回る事にした。」

暫く歩くと学校らしき建物が見えてきた。

千夜「お、まずはここに行くか」

彼はまだ知らなかった。

ここがかの有名な長点上機学園であると…

千夜が入り口を探していると、教員らしき者がいた。
すかさず声をかけ「
だがそこで彼は考えた

（そういえばここってどの位のクラスの学校なんだ？）
そう、彼は学園都市へやってきて数時間程なのだ。
システムスキャン
身体検査もしていない。

もしもここが名門校ならば門前払いをくらうのは目に見えていた。

千夜「学園長でも探すか」

ここが一番上トツに話をすれば活路はあるはずだ。

(大体学園長的な人は、良い人だからな。話くらい聞いてくれるだろ)

更に歩き回り(教員、生徒に見つからぬように)学園長室らしき部屋へ入る

コンコン

?「誰だ」

お、爺さん声!これは良い人フラグバリバリに立ってるぜ!

千夜「すみません、私はこの学園へ入学したくやってまいりましたが、実は大体の能力は

わかっていても、自分の能力のレベルがわからない次第でございます…」

?「ふむ、あいわかった。丁度明日、我が校では身体検査システムスキャンがある。

だから、まずは仮入学、という形でよろしいかな?」

こ、この人は…無茶苦茶良い人じゃねえか!

千夜「はい!ありがとうございます」

?「なんのなんの、僕は有能かどうかは自分の目で判断したいからう。おお、そっいえば貴殿の名はなんと申すか」

千夜「ディゼルタ…じゃなくて千夜煌貴と申します」

？「千夜煌貴か、儂は浜瀬 双磁と言う者だ」
名前がかつけえな…

普通に読むとはませそうじとどこにでもいそうな苗字と名前なの
な。

浜瀬「では、明朝08:30にここへ来るように」

千夜「その前に、一つだけよろしいでしょうか」

俺はずっと心配だった事を告げる。

そう、俺はさつき学園都市へ来たのだ。

どういふ事かわかったらどう？

千夜「私の住む所はどうすればよろしいので？」

浜瀬「そうか、ならば…おおい！貴文君！」

大声で誰かを呼ぶ。

貴文「なんででしょうか、学園長」

出て来たのは思い切りゴツイ体付きの人物だ。

貴文とか呼ばれてたな、多分教師の中でも

『生徒指導』なる階級に鎮座していることだろう。

浜瀬「それがだね、ここにいる子は

貴文「はいはい、住居へ連れていけでしょう。これで何回目だとお
もってるんですか？」

浜瀬「まあ、少し老いぼれの我俣を聞いてくれんかのう」

貴文「もうその台詞は何回も聞きました、ハア…わかりました。で
は、コイツは預かっていきますからね」

え、ちょ！コイツ軽々と俺を持ち上げやがった！

貴文「では、失礼します」

そして人気の無い所へ行くと、俺の足がようやく地面についた。
貴文「学園長の命令だから仕方無くではあるが、貴様に住居を与えてやる」

千夜「はあ、ありがとうございます」
取り合えずこれで住居（仮）は確保だな。

いきなり貴文さんはメモを俺に渡してきた。

貴文「そのメモに書いてある所へ行け、そこに俺のダチの黄泉川つてやつがいる。そいつに「長点上機から来た」と言えば全てを察してくれる、はずだ」

黄泉川ねえ、じゃんじゃん行ってる体育教師を探せばなんとかかな。
な。

去り際に貴文sが

「まあ、部屋が空いてるかは別だが」
と呟いた。それこそツイッターでツイートする位自然に。

千夜「（うっし！原作キャラとようやく出会えるぜ！）」
そんな期待に胸を膨らませていると
ふと、こんな会話が聞こえてきた。

「ねえ、知ってる？今日、久々に第一位が登校してきたんだって！」

「え！粉バナナ！」

「ですのネタは古いから止めた方がいいよ」

「じゃあ、嘘だ！」

「ひぐらしもかなり昔だと思っけど」

俺と友達になつて欲しいヤツが一人いるし。

千夜「（一方通行ねえ、まあ、俺には関係ないがな）」
だが、次の廊下を曲がった瞬間

?「ッ!」

千夜「うおっと、危ない」

誰かとぶつかりそうになった。

千夜「すまなかったと思っっている。後悔はしていない」
?「んだテメエ」

こ、この特徴的な喋り方!

千夜「まさか、アクセラレイタ一方通行!?!」

?「御名答。」

あ、ノツてくれた。

と思っただが

千夜「何すんだ!普通の能力者なら即死レベルの攻撃だぞ!」

一方通行「だつたら、テメエは何で今、生きてるんだ?」

!やべえ、俺の能力の一部に勘ずいたか!?

一方通行「まア、いいか、だが次は無いと思いな」

千夜「よく言えたな、後悔するなよ?」

一方通行「テメエも学園都市最強の能力者を目の前にしてよくそんな事言えたなア」

ああ、死んだな。

千夜「クソが!エアロック空間固定!」

一方通行にはきかないが、少しなら時間が稼げる。

これなら行け!

一方通行「残念だったが、俺に出会ったら、そこから先は一方通行だ」

すぐさま一方通行が脚力のベクトルを操作し、俺を追いかけてくる。

千夜「そうだ!」

一方通行「どこまで逃げてても一緒だぜエ？」
俺は宇理炎を握り締める。

千夜「これならどうだ！」

宇理炎を振るい、神の炎で一方通行を焼く。

一方通行「こんなチャチなもんで俺から逃げられるとも思っ…がぁあ！」

成功だ。

一方通行は確か魔術は上手く反射出来ないはずだ。
ならば、神の炎を使えば問題ない。

千夜「テメエが俺に勝てない理由は1つ、たった単純な答^{シンプル}えだ」
さあ、おきまりのあの台詞だ！

千夜「テメエは俺を怒らせた」
そう言い残し、千夜は学園を後にする。

一方通行「クソが…俺が、勝てないだと？」
そう、一方通行は、最強であった。
だが、無敵ではない。

どんな敵にでも勝てるなんていう事はない。
それはさっきのやつも同じだ。

なのに何故？

一方通行「面白エ、暫くこの学園に来てやろうじゃねエか」
一方通行は決めた。

ヤツをも越し、今度こそ、本当の最強になると。

学校探して三千里歩くなんて事はない(後書き)

いやあ、長いなあ！w w

書き上げるのに久々一時間以上かかりましたよ。

それと、一方通行とバトルしてるのに何故クロウにならないか、お答えしましょう。

これは千夜君が、バトルではなく、逃げるために、能力を使ったからです。

それだけなのですよ、みー

では、この辺で後書きを終わらせて戴きます。

感想貰えると続ける気が増えます！

予告と違ってもいいじゃない。だって人間だもの（前書き）

眠くて全然書けない…まあ、頑張りました。
では、本編どうぞ

予告と違ってもいいじゃない。だって人間だもの

見事一方通行を振り切り

貴文sから渡されたメモ通りに学園都市を歩く千夜。

だが、そこでまっていたのは、悪夢だった

千夜「ここか」

簡易キンクリしてきたためそんなに疲れてはいないが、先程の一方通行戦で使ってしまった体力は完全には回復していないため、早く休みたいのだ。

取り合えず中に入ってみるか。

千夜「こちらズネーク。今から潜入捜査を開始する」

?「危険だ、ズネーク！単独行動はよすんだ！」

千夜「分かってるぜ、大佐あ！」

千夜「絶対に成功させてみせる。俺を信じろって！」

千夜「じゃあな！大佐！」

?「ズネーク？ズネーク！！！」

?「えーと、どちらさまで？」

千夜「早速気づかれちゃったか、だが俺のForceは止まらないぜ！」

?「いや、何言ってるのかさっぱり…」

あ、そうだ！こいつもここの生徒なら黄泉川教諭の現在地も知っているかも

千夜「意味不明なこと言っただけが悪かった。だが、これだけは聞かせてくれ。黄泉川教諭は今現在どこにいる？」

？「えーと、確か黄泉川先生ならあっちの方で見た…っってもう行っちゃったか」

よし、早い所宿確保だ！

しかし彼はまたまたまだ気付いていなかった。

今出会った人物こそが

上条さんであると…

予告と違ってもいいじゃない。だって人間だもの（後書き）

終わり方まで酷いとは。

まあ、眠いし、仕方無いと思っている。

ではまた次回（感想を下さると作者が調子に乗って投稿ペースが早まります）

住まい探しのすゝめ(前書き)

あー、なんかサブタイトルがESネタに走ってきているな…
そんなぼやきはさておき、本編どうぞ！

住まい探しのすゝめ

千夜「いきなりで悪いがお前が黄泉川教諭だな？」

？「流石にいきなりすぎて状況がよく理解出来ないじゃんよ……」
そういえば貴文sから授かった文書があったな。

千夜「ならばコレを見よ！全ての事情が分かる（らしい）優れたものなのだッ！」

そういつつ、黄泉川教諭に貴文sより授かった文書を渡す。

？「あー、またか…アイツも苦労するじゃんよ……」
やはり一枚のメモだけで事情が分かったか…怖るべし、貴文s

黄泉川「事情はわかったじゃんよ、後は黄泉川お姉さんに任せなさい！」

おお、頼もしいことこの上ない…

黄泉川「じゃあ、部屋が用意出来たら連絡するから、それまで、学園都市を適当に見学してるじゃんよ」

千夜「あ、じゃあ、これが俺のアドレスなんで」

アドレスを教えて、直ぐに校舎を後にする。

…にしても「また」って事は前例があるって事だよな…まあ、いいが。

千夜（にしても腹減ったな）

確か長点上機からここへ来るまでにコンビニがあったはずだから、そこできなにか買うとするか。

……出来るだけ一方通行に会わないように。

千夜「ゼエ…走ってきたのは…流石に…ゼエ…辛かった…」
無理に全力疾走してしまった為、もう自立二足歩行が出来ない程疲れてしまっている。
実はここに来るまでにファミレスもあったのだが、手持ちの金を考えても、コンビニの方がいいのだ。

店員「いらっしやいませー」
相変わらず無愛想だな、と思いながらもまずは飲み物コーナーへ向かった。

昔、コンビニは儲ける為に飲み物コーナーを店の奥に設置してるといふ話をテレビで見たが、今はそんな所に設置すんなよ！って気分だ。

千夜「ま、まずはスポーツドリンクを一本、それからコーヒーでも大量に買ってやるか、2つの意味があるけど」
1つ目はただ単純に飲みたいってだけ。
2つ目は一方通行に対するちよつとした反抗だ。

そして、他にもパンを数個籠にいれ、レジへ向かう。

店員「以上でよろしいで…ヒッ」

千夜「あ、ヤベ」

そう思った瞬間、体はもう動いていた。

金をだし、レシートはいらなと言つて、買ったものを奪つように手に取り、出入り口へ走りだした。

何故この時走れたのか、それは彼自身もわからないという…

一方通行「ンダア？今の高速で走つていったヤツは
よオ」

だが、一方通行は特に気にせず、飲み物コーナーへ向かう。

だが、そこにあるはずのコーヒーは、千夜に買い占められてしまつたため、全て無かつた。

一方通行「まさか、さっきの野郎、今日長点上機で会つたヤツじゃねエか？」

まあ、と一方通行は軽く息を吐き、別のコンビニへと向かう。

一方通行（長点上機の生徒にあんな野郎は居なかつた。ならばアイツは絶対に明日の身体検査にはくる。だったら、ヤツの実力が見れるチャンスでもあるわけだ、まア、楽しみにしといてやらア）

住まい探しのすゝめ（後書き）

ふう、宿題終わんねw

明日は一日中頑張るので、更新は無いかと…

感想は貰えたら今回みたいにリアルを犠牲にしても書きますww
では、また次回お会いしましょう。

9/14サブタイトル変更

色々ありまして。(前書き)

どうも、電改です。

相変わらず眠気が半端ないですが、頑張って更新していきます。
では、本編どうぞ。

色々あります。

千夜「本当、昨日は色々あった。」

あれから色々とあったのだが、それはまた後日話すとしてよう。
それよりも今日は身体検査システムスキャンの日だ。

俺は少し緊張気味で、学園長の居る部屋へ入る。

コンコン

千夜「失礼致し候」

あ、昨日見てた幕末志士の喋り方が移っちゃまった！

学園長「よくぞ まいった！」

あんたはどここの王様だ。

出来る事なら銅の剣ぐらいよこしてくれ。

貴文s「よし、千夜。こつちについてこい。」

学園長…よくぞまいった！しか言ってねえww

もっと喋らせてあげようよw

貴文s「お前、声に出てるぞ」

あつ、やべ。これは印象悪かったか？

まあ、そんなこんなしてるうちに鉄格子のついた…リアルな牢屋みたいな所に連れてこられた。

千夜「こ、ここは？」

貴文s「見ての通り、お前の能力の検査場だ」

ですよー

連れてこられる場所が牢屋とか俺、何かしたか？とか思ってたぜ。

貴文s「では、検査内容は後に伝える。」

「つて事はまさか…な。」

貴文「それまでこの中に入って待ってる」

千夜「な、なんだってー！」

次回へ続く。

色々ありまして。(後書き)

短い…でもこれが今書ける限界だ、
僕はもう疲れたよデスラッシュ…一緒に寝よう(永遠に)

自重。

ではまた次回

身体検査、そして…（前書き）

どうもです。

初期の活気はどこへやら、今では更新ペースがガクッと落ちました。自由気ままにやっていますので、応援よろしくですー。

身体検査、そして…

牢屋的な所に入れられて数分後、アナウンスが聞こえてきた。

アナウンス『これより、実験を行います。まずは、お手元の腕輪を装着して下さい』

えーと、腕輪、腕輪っと、あつたあつた。

アナウンス『装着しましたか？では、汝に幸あれ…』

…

放置かよ！

流石にこれで放置はないぜ？

それにしても、もしかしてこの腕輪…勝負に負けると毒が注入されるとか！？

……ないか。

それよりも早く始まんないかなーっと。

そう、それは突然やってきた。

ガシヨン、という機械音の後、学園長の声が聞こえてきた。

学園長『えー、今回は青龍房を目指してみました。それではルールを説明します。』

ルールは以下の通り。

- ・能力は腕輪により解析される
- ・能力とレベルがわかり次第「身体検査」は終了
- ・30分避け切るか、飛んでくる物の中にあるダミーを壊せば部

屋から出られる

・それでも能力不明の場合は…らしい

学園長『では諸君、健闘を祈る!!!』

どこからか叫び声が聞こえてくるあたり、他の生徒もいきなり牢屋に軟禁され、腕輪をつけ、現在にいたるって感じだろう。

スピーカーから声がしなくなった途端、ガシヨンという音がしたわけが理解出来た。

そう、壁一面に穴が開いているのだ。

千夜（ここから鏝とか出てくるんじゃないだろうな…）
予想は的中した。

穴から次々出てくるソレをなんなく避ける。

まだまだスピードも遅いし、弾幕ごっこに比べればどうという事はない。

『…S…2…』
何か聞こえたと思ったたら途端に鏝の出てくる速度、その量、双方が急激に増した。

千夜（まだ、見える！）

だが、それでもなお、軽いフットワークで千夜は避け続ける。

『…20』

千夜「セーフティロック解除！」

癖で言ってしまった。

危ない、と思った瞬間。

自分の半径2、30Mの空間の時間が、止まったように感じた。

それにより、千夜は直ぐにダミーを見つける事が出来た。

千夜（うえきの法則で天界人のレベル上げてるみたいだな…）

アナウンス『千夜煌貴、能力査定、ダミー破壊共に成功。ドアの口

ツクを解除します』

どうやら無事に終われたようだ。

では、これからどうするかな…ん？

千夜の見るところには1人の少女がいた。

千夜はその少女を知っている。

そうだった、今まで忘れていた。

自分がここに来た本当の理由は、

千夜「アリサ！」

身体検査、そして…（後書き）

さすがに無理矢理すぎたかな？とっていますが、私的にはこれでいいかと。

ちなみにこれからの流れとしては

日常偏（原作キャラとの絡み有） 原作偏（どのくらいまでいこうかは決めていません） オリジナルストーリー（まだ内容は考えていません） 原作偏 オリジナルストーリー 原作偏（最終巻まで）を予定しております。では、また次回！

ネタ回？いいえ、k(ry)(前書き)

オリキャラはまあ、10人程度集まればいいかなと思っている。
目標【今回こそネタ回にする。頑張る。】

ネタ回？いいえ、k(r)y

アリサ「千夜…？貴方千夜なの？」

やはり当たりだった。

彼女は涙目になりながらこちらへやってくる。

フラグ立ったな。

そう、考えてしまった自分を呪いたくなかった。

そうなのだ。彼女の手元をよくみると、そこには

硬あく握り締められた38mm口径銃が…って危ねえ！発砲してきやがった！

アリサ「なんで早く助けにこなかったの！？ねえ、なんで？」

いえ、こちらにも事情が…いえ、大それた事ではないのです。

ちよつと神様のなことしてただけでありまして、はい。

——と、説明しながらも発砲してくるアリサ。

確かあれは装填数が8発のはずだ。

弾切れになればマガジンをかえる時に、よほどの手だれでなければ若干のタイムラグがうまれる。そこを俺の真・「幽閉されし姫君」を使い、叩く！

バン、バン、バン。とミリタリー好きの俺には結構好きな心地良い発砲音が聞こえてくる。

今までで、7発。

後1発撃ってくれば…

アリサ「まさか、マガジンを変えるスキに——とか思ってる？残念。私の能力は「銃器製造」ガンクリエイター。説明は…しなくてもわかるよね？」

あるうえー？そんなのアリすかー？

アリサ「卑怯なものにもあったもんじゃないわ」
確かに性格変わってらっしゃる。

俺が持つてる武器で反撃出来るもの…仕方無いな、アレを使うか。

千夜「いいだろう。では、俺も少しかり卑怯な手を使わせてもら
う」

簡単だ。アイツの動きが1秒でも制止すればいい。
ならば、俺のとれる最善の策は——ッ！

千夜「極寒の地の氷の神よ、我に力を与えたまえ。歌声は氷柱、氷柱は剣。身を貫きし氷の刃よ、今嵐となり我が障壁を壊さん…。エターナルフォースブリザード……！」

アリサ「え…。」

その場が氷つく。

ここでエタブリの効果を教えてやろう。
相手は必ず死ぬ。

そう、つまりは

千夜「The・world！時よ、止まれ…。」
今度は本当に時が止まる。

この時間を利用し、一気にアリサとの距離を詰める。

後3m弱といったところで時が動きだす。
だが、充分すぎる距離だった。

千夜「悪いがアリサ…お仕置きの間だ」
アリサ「ひッ！また、アレ…？」

俺はその問いにたいして笑いながら。

千夜「罪の深さなんて自分に聞いた方が早いんじゃないか？」

アリサ「…う、うん。ここは？」

四方を見渡す限りでは、白い壁しかないが
一応ベットには寝かされていたようだ。

千夜「眠り姫のお目覚めか…気絶するだけで丸1日も寝るか？普通」
アリサ「ここは？」

千夜「まあ、俺の部屋…ってとこかな」

アリサ「そう…」

よほど負けたのが悔しいのか、アリサはずっと俯いていた。

まあ、仕方無いよな。当然の報いだ。

ってかあれは常人だったら即死だぜ？俺だから避けれたがな、あれ
は思いつきり命タマとつたる！の勢いだったから…つい、こっ、カッと

なっ…

よし、学校で聞かれたらこう答えよう。

ついムラムラしてやった。反省はしている。

アリサ「でもさ、どうして千夜は彼処にいたの？」

千夜「いや、ちよいと青龍房を体験してただけだ…ほぼ能力無しでな」

アリサは驚きながら俺に向かって虚空から呼び出したハンドガンを発砲してくる――が、なんの躊躇いもなく避け、一瞬でアリサの前に移動し、銃を持っている手を蹴る。

アリサ「アレが避けられるなら私の弾丸なんか避けられて当然か…」

あーあ、更に事態が悪化していくよ。

まあ、ここでいつまでもうなだれてはしょうがない。

だから、今俺に出来る最善の手は…

千夜「そうだ、学校 行こう。」

ネタ回？いいえ、k(r y(後書き)

今回は結構ネタ入れたぜ…

そしてハンドガンなんてwiki見るほど知識が皆無だったぜ。

そして今回、ようやくこの二次創作のタイトル「とある異聞と銃器製造」の意味がわかりましたね。つまりは主人公とメインヒロイン

なわけですよ、はい。

では、次くらいで溜めに溜めてきた主人公の能力が発覚します。

…4文字で考えるの難しかったです。

9/14サブタイトル変更

能力判明（前書き）

台風6号接近記念です。

では、本編をどうぞ。

8/5サブタイトルを修正

能力判明

それから1時間後、俺は学園長室にきていた。

学園長「さて、千夜君」

どうやら機密保持のためか、俺と学園長の2人しかいないらしい。

学園長「これが、身体検査の結果だ。」

そう言つて学園長は懐より茶色の封筒を渡してきた。

この中に結果の書かれた書類があるのだろう。

千夜は、恐る恐る封筒を開け、中身を確認する。

千夜煌貴 力 B 知力 B - 素早さ B 殺傷能力 B + : e
t c

千夜「——つてこれはどこのスタンドの解析結果じゃあー!!」

まだ力とか知力とかは許せるレベルだ。

殺傷能力までくると流石に……という事だ。

学園長「まあまあ、落ち着いて。それよりも、最後の一枚。それが君の最も気になっているものではないか？」

ま、さか……

俺の能力がついにわかるのか……

千夜「これが、最後の一枚…」
いよいよだ。

俺は、この時を待っていたー!!!

学園長「あ、見てるね、でもその書類には詳しい事は書いていない
だろうから口答するよ」

千夜煌貴 能力名『アブソリュートフィールド領域支配』

学園長「まあ、読んで字の如く。って感じだね」
なんだか学園長の話し方が段々と友達感覚になっていく気が…まあ、
いいか。

学園長「で、レベルとしては5相当だね。序列は…6位らしい」
研究しがないの能力ってことか。

学園長「うん。じゃあ、これで君もはれてこの学園の生徒だ。」

ここで必要なものは後で寮に送って貰えるらしい。

なので俺はこの学園の構造になれるため少し散歩をすることにした。

能力判明（後書き）

短いデスが、ここで終わりです。
では、また次話で会いましょう。

超電磁砲、現る。(前書き)

一度データが紛失したので、書き直しです。
では、本編どうぞ。

超電磁砲、現る。

散歩も終わったので、寮に帰ることにする。

今日は6月19日。

原作スタートまで後一ヶ月。

原作が始まるまでには自分の能力くらいは使いこなせるようになって方がいいのかもしれない。

千夜「（しかし、原作がまだ始まってないから平和だなー）」

そんな呑気な事を考えていると、背後から誰かに呼ばれたようなきがした。

振り返ってみるとそこにはあらふしぎ、序列第三位様がいらっしやるではありませんか。

千夜「あー、えーと、俺を尋ねてきたのか？」

御坂「そうよ、だってアンタ、学園都市（こく）にきてまだ一週間もたっていないでしょ？」

やっぱり上にはバレていたか。

御坂「凄いわねー、あの第七位を超える原石ってことで、ニユースはもちきりよ？」

千夜「へー、そーなのかい。じゃ、俺は急いでるんでー！」
戦闘フラグを感じたので、適当に受け流して逃げる。

御坂「……………！」

何か言ってるようだが、無視しよう。

そうして、寮へ帰ってきたわけなのだが。

千夜「なんかボスクラスの化物にばっか出会うなー」

どうせならもう少し平和的な原作キャラに会いたかった。

そして、俺の部屋の前には段ボールが何個か置いてあった。

まあ、あの学校からの荷物だろう。

そういえば学校名みてなかったなー、と思いつつ、部屋に荷物を運ぶ。

そして、段ボールを一個開けてみると、制服やら教科書やらが詰め込まれていた。

千夜「生徒手帳とかになら書いてあるか？」

生徒手帳を段ボールから出して、中をみてる。

そこに書かれていたのは

『下記の者は本校の生徒であることを証明する。』

氏名 千夜煌貴

学校名 長点上機学園

学園長 浜瀬双磁』

な、長点上機…だと？

だが、思い返してみれば、長点上機だから、一方通行がいた。まずそこで気がつくべきだった。

千夜「なんか、大変なところに入學しちゃったなあ」

超電磁砲、現る。(後書き)

しまったアアアアア!

SS2を読んでいなかった! orz

明日読んでくるので、ちょっと変更する点があるかもです。

そして超電磁砲、現るなのにすこし会話したくらいで終わってしまいました^^

原作キャラとの本格的な絡みは流石に原作編に入るまでないです。

千夜、生徒会へ入る。(前書き)

学園ものでは定番ですよね。

スペックを書くのは苦手なので、キャラに例えさせていただきます。
では、本編どうぞ。

千夜、生徒会へ入る。

俺が長点上機に通い始めて数日後、俺は学園長室に呼ばれた。

千夜「どうしたんだ？いきなり呼び出して」

学園長「実はな、君には生徒会に入って欲しいのだ」

生徒会か、面白そうだな。

学園長「理由としては生徒会長が家出した」

千夜「いやいやいや！家出する程ハードなのか！？」

俺は学園長に問い詰めてみる。

学園長「いや、ただ雑務をこなすだけで、後は好きにしてくれて構わない」

もしかしたら前会長はかなりマジメ君だったのかもしれない。

だが、それなら逃げ出したのにも納得がいく。

千夜「引き受けさせて貰おう。で、他のメンバーは？」

学園長「ああ、ありがとう。期間は今日から次の役員選抜までだ」

メンバーなら、生徒会室に揃っている。とのことだ。

そうして俺は生徒会室のまえに立っている。

(突入するか?否、まずは様子を見てから――
「あれ?千夜、こんな所で何してるの?」

む、空耳か?背後からアリサの声が…

「思いつきり心の声がおもてに出てるよ」

千夜「やっぱりアリサだったか」

アリサ「それよりも生徒会に何か用でもあるの?」

千夜「いや、お前には関係ないことだと思っが」

すると、アリサは

アリサ「ふふん。私はこれでも生徒会の副会長なのです!」

千夜「へー……ってえええ!?!」

さすがに俺は驚きが隠せなかった。

アリサ「それで、何か用?」

千夜「たいした用じゃない。俺が生徒会長になれって学園長に言われただけだ」

アリサ「それは凄いな――ってえええ!?!」

そしてアリサはそのまま生徒会室の中に駆け込んで行った。

千夜「ヤバいな、早めに撤退しなければ」

明日でもいいだろう。と自分に言い聞かせ、帰ろうとする、が

アリサ「ほら、こつちこつち!」

アリサが仲間を連れて登場してきた。

仲間は3人比率は女2人男1人だ。

まずはFF4のリディア(幼女)みたいなやつが話しかけてきた。
いるよね、ロリ体形なやつって。

「えっと、新しい会長さんですよね!?私は「はいはい、自己紹介なら明日聞くからね」

強引に会話を切って走りだす。

「あ、逃げないで〜」

何か聞こえたが気にしたら負けだろう。

千夜、生徒会へ入る。(後書き)

今日も7時間昼寝をしてしまった。

そのおかげでデータが一回吹っ飛びましたw

最近データが吹っ飛ぶ 書き直し

で投稿しています。

では次回まで暫しの別れとなりますが、これからもガンメイカーを
よろしく願います。

生徒会メンバー自己紹介（前書き）

一応メンバーのスペックを考えていました。
次回からは原作ルートに入れると思います。
では、本編どうぞ

生徒会メンバー自己紹介

千夜「来た瞬間にコレかよ…」

おっす、オラ…じゃなくて俺あ千夜煌貴。

簡単にこれまでの事の説明をすると
学園長に呼び出される

生徒会長に任命される

アリサ+他生徒会メンバーに追われる

なんとか逃げ延びる

翌日、生徒会室に入る

おとしあな 今ここ

これからどうするかを考えているが、中々いい打開策は見出せていない。

だが、これはチャンスでもある。

今、ここにいるのはあのリディアみたいなやつとアリサのみ。

他の二名が来たらヤバいが、今ならば戦力はこちらの方が上、だと思われる。

ならば早めに縄で縛るかして無効化しなければ…

「あ、会長さん何やってるんですか？」

お、男の方がきてくれた。
上手くやれば味方になるかもしれないな。

アリサ「あ、光代。やっと来たの？」

光代「今北産業」

千夜「部屋に入る

落とし穴に落ちる

オワタ」

光代「会長さんも大変なんですね…」

同情するなら助けてくれ。

光代「助け、ですか。ならこれを…」

光代君が置いていったものは…

(エアガンだとおおおおおお！)

これは勝つる。

少しでも怯んでくれれば逃げやすくなるしな。

だが、この落とし穴…中に接着剤が仕込まれていたようで、抜け出せないようになってるんだ。

取り合えず後1人来る前にさっさと逃げ出

「どうやら私が最後の1人のようですね」

絶望しかなかった。

アリサ「ほら、皆にちゃんと挨拶してね」

千夜「俺が、蒼天の奇術師、怪奇の瞳等の二つ名で呼ばれて「ないから」すいませんでした」

アリサが最近怖いです。

千夜「えー、では改めて。俺が千夜煌貴だ。よろしくな」

アリサ「じゃあ、続いて質問タイムに移りまーす」

もう、どうにでもなってくれ…

「あ、じゃあ質問」

アリサ「はい、じゃあ、美穂ちゃん！」

「千夜会長とアリサ先輩ってどんな関係ですか？」

『ノーコメントで』

おっと、不覚にも声を揃えてしまった。

でも、まさか死んだ先であいましたー、なんて話しても信じないだろうし、これが一番の選択だと思う。

美穂「前に千夜会長が先輩をおぶって帰るの見たのになあ…」

あー、身体検査の時か。

アリサ「き、気を取り直して次の質問ある人ー」

「では、私が」

アリサ「じゃあ、杏奈ちゃんね」

杏奈「今回の会長は使えますか？」

つまりは精神が強いか、という事か？

千夜「PC関係なら任せてほしい。」

杏奈「わかりました。ありがとうございます。」

アリサ「光代は何かある？」

光代「いや、何も……」

アリサ「あ、そう」

酷い扱いだな、後でジュースでも買ってやろう。

アリサ「じゃあ、皆頑張っついてね！」

これが、原作開始の20日前の出来事であった。

生徒会メンバー自己紹介（後書き）

×がどうも思いつかないな…

どうも電改です。

一応身体程度は晒しておきます。

津和野光代 男 副会長 身長170cm 体重58kg

椎名美穂 女 書記 身長142cm 体重38kg

鶴野杏奈 女 会計 身長158cm 体重44kg

では、また次回！

いつもながら考えつかないサブタイ(前書き)

サブタイトルに意味はr y

いつもながら考えつかないサブタイ

翌日

光代「やっぱりH&a m p ; K いいですよね」

千夜「俺はライフルしかないな」

いきなりで悪いが、この話をしているのには訳がある。

昨日

アリサ「今日はこの辺で終わりね」

杏奈「皆さんお疲れ様でした」

長い一日が終わり、俺は家路につこうとした。
だが、帰れなかった。

千夜「光代にエアガン返してねえや」

光代はどうやらこの学校の裏山に行ったらしいので、俺も追いかけることにする。

少し歩くと光代を見つけた。

その手にもっているのは、『マルイVSR10プロスナイパー』なる名前のエアガンだったか。

千夜（ちよつと驚かしてみるか）
忍び足で近づいていき、自分の得物『ベレッタM92F』を構える。

千夜「チエックメイトだ」

光代「なっ！」

慌てて後ろを振り向くが、そこに居たのは敵ではなく…

千夜「よう」

銃を構えた自分の所属する生徒会の会長だった。

光代「会長…その銃いいですね」

いつもながら考えつかないサブタイ（後書き）

アリサが実銃を使うならばこちらはエアガンを使わせていただく！
電改です。

盆は宿題に追われると思うので、書ける内に書いておきます。

今回は一応前回の伏線回収回です。

では、また次回！

光代奪還作戦！(仮)
(前書き)

寝る前に少しだけ更新

光代奪還作戦！（仮）

一方その頃

仲間A「いやあ、やはり強い人達とやると、自分の未熟さが分かるねえ」

仲間B「そういえば光代は何処へ？」

仲間C「無線も通じないし…何かあったのでは？」

仲間B「よし、わかった。私が責任をもって探しにいこう」

仲間A「そんな無茶な！あなたの学校がメンバーの中で一番門限に厳しいところなのに何故？」

仲間B「理由など、後で考えればいいさ。今は光代と早く再開したい。それだけだ」

仲間A「ならば僭越ながら、私も連れて行っていただけないでしょうか？」

仲間B「よし、では行こう。光代を探しに！」

仲間C「…早く寮に戻ろう」

光代「へえ、こんな威力がでるんですね」

千夜「まあ、な」

俺の愛用している銃は結構改造を加えたために、かなりの威力がでるようになってる。

光代「あ、すみません会長。ちょっと無線が入ったんで、話してきていいですか？」

千夜「ん、ああ。そういえば仲間がいたんだっただな」

光代「どうやらこの近くにいるみたいなので、ちょっと見てきますね」

千夜「おう、気をつけてな」
帰るか、と思った時だった。

？「動くな！」

千夜「…俺に下手な脅しはやめた方がいい」

？「ふん。とにかくさっさと光代をこちらに渡して貰えば、いいんだが」

どうやら仲間は光代が俺に拐われた。と思っっているらしい。

千夜「いや、そうしたい気持ちはやまやまなんだが…」

？「が、どうした」

千夜「光代なら、お前達を探しにいくって言って、何処かへ行っちまっただぞ」

？「そんな事があるわけ…」

ない、とでも言おうとしたのだろうか、油断したのが間違いだ。

千夜（さっさと終わらせて、寮に帰らせてもらおう…よっと！）

俺は能力を使い、一気に距離を詰め、袈裟蹴りを放つ。

そして、怯んだスキを狙い、回し蹴りを喰らわせる。

千夜「じゃ、俺は急いでるんで。」

そっぴいえば、最近は寮に逃げ帰るってパターン多いような…

光代奪還作戦！（仮）（後書き）

一応、次で原作に入る予定です。

…あれ、デジャブ？

軽くプロローグ（前書き）

電改でございますーす。

…すみません。深夜のテンションでやりたくなくなっただんです。

さて、ブログを見てくださってる方はわかると思いますが、千夜はあんな容姿なのですよ……。

…では、原作偏スタートです……

軽くプロローグ

やあ、皆。

千夜煌貴は不幸な少年である。

学園都市にてとある学校に転入した。
ここまでではよかった。

そこからいきなり学園都市のLEVEL5、しかも序列第一位の『一方通行』と戦ったのだ。
だが、千夜煌貴：つまり俺はSIRENという世界で手に入れたこの世には無い武器「宇理炎」を使うことにより、見事、一方通行を撃退することに成功した。

それから何日かたったころ、学園長に呼び出され、生徒会長（仮）になってくれ、と言われた。
俺は少々生徒会長という役職についてた。

一般的に見れば「幸運だ」とか言われるだろうが、そうではない。
俺にとっては…ただ面倒なだけなのだ。

これは、そんな俺：千夜煌貴が地獄にて出会った少女「アリサ」と共に第三次世界大戦を生き残る、ただそれだけの物語である。。

軽くプロローグ（後書き）

もうネタがないや…

…取り合えず原作12巻あたりでアリサが第三次世界大戦を生き抜くために必要なフラグを立てておきます…

…アリサの絵も希望があればpixivに載せるよ。

…詳しくはブログの方をチェックなんだよ…

ヒーロー（上条さん）は遅れて登場するものさ！（前書き）

今回より原作1巻を始めていきます…

なんか千夜が単独行動ばかりしてますが、電改はキャラを同時に動かすのが苦手なので、そこは割り切って下さると、幸いです……

では、本編始まります…（今回はちゃんとしたサブタイトルになった気がする）

ヒーロー（上条さん）は遅れて登場するものさ！

（7月20日）

『某所にてとある少年が学園都市外部よりきた、自身を「インデックス」となる少女と出会う』

つまりは、俺は介入できないわけである。

介入できるところとしては、魔術師【ステイル・マグヌス】と上条当麻の戦いくらいか。

援護するくらいはできるかもしれない。

幻想殺しで打ち消されなければ、ではあるが。

「さて、ここで問題がある」

そう、それは

「俺の実力だと簡単にステイルにも勝てるが、勝ってしまっているのか？」

まあ、取り合えずは学校へ行ってから考えるところでしょう。

夏休みであろうと生徒会に仕事はあるのだ。

作者「時間が無いので、キングクリムゾン！」

(キンクリにより、時間は夕方になりました)

「…よし、終了の時間だ。皆、解散!」

俺の声に反応して、皆、後片づけを始める。

さっさと片付けてしまわなければな…

今回の目的は「魔術師への接触」

つまりは、上条よりも早く学生寮へ行かなければならないのだ。

「ねえ、千夜」

アリサが唐突に話しかけてきた。

「あ、あのさ…今日、一緒に帰らない…?」

「あー、悪いアリサ。今日はちょっと…寄る所があつてな」

悪いが、これは単独で動いた方が目的が達成しやすい。

そのために、誘いを断ることにする。

「そ、そう…なら、仕方無いか……」

アリサがかなり悲嘆しているが、これも目的のためなのだ。

そう、俺の主とする目的は…

原作に支障を出さずに原作に介入する。

やはりこんなファンタジーみたいな世界にこれたのだ。
楽しまねばいけないだろう。

「そういうわけで、俺は、先に帰るわ！」

「……お疲れ様ー」「」「」

さて、上条の住む学生寮へ移動するまで、少し語るのを止めるとし
よう……

ヒーロー（上条さん）は遅れて登場するものさ！（後書き）

キングダムソンの仕方無いのです……

主人公の主とする目的は最終的には変わりますよ？

しかもツイッター見てくださってる方はわかるかもしれませんが、英雄王（金ピカ）、IS、この2つの単語が重要になってくるかもしれないですよ？

…かもですが。

魔術師 Differential ability (前書き)

ステイルさん14歳

電改です。

今回はオリジナルな部分を含ませているので、多少矛盾があるかもしれないですね。 どんどん指摘して下さいね。

更に！禁書目録のサブタイトル風に英語をつけてみました。(Google翻訳でやったものですが…)

では、本編入ります。

魔術師 Differential ability

入り口はオートロックらしいので、仕方無くビルから移動することにする。

今頃上条は「オヤツ」を食べているのだろう。
多分。

「うん？どうしてここに魔力を持った人間がいるんだい？」

この、特徴的な喋り方は…

「どうしたんだい？そんな驚いたような顔して」

「驚いた「ような」じゃなくて驚いた、んだよ」

「うん？僕としては1つ目の質問に答えて欲しいのだけど」

魔力を持っている。

そんなはずがない。

自分は一度も魔術なんてものは発動したことがな
あつた。

自分の持っている「宇理炎」。

これは魔術と関連があつたはずだ。

それを発動したことはある。

それによって、眠っていた魔術回路が目覚めた、というところだろう。

「まあ、そんなことよりも…」

魔術師は言う。

「あの子を渡してくれないかな？」

あの子、とはインデックスのことだろう。

俺とは面識があるわけではないが、コイツに渡すのも何か癪なので

「渡さない、と言ったら？」

「うん、君を殺してでも連れて帰るよ」

まあ、こんなところでいいだろう。

そろそろ戦闘に入りそうだな。

無駄話はキリをつけて、戦いに集中する…

「なあ、お前は一体…何者だ？」

「ステイル＝マグヌスと名乗りたい所だけど、ここはFortis 931と言っておこうかな」

Fortis…日本語だと強者とか言う意味だった気がする。

「君はこの辺の説明なんてわかってそうだから、さっさと——死んで貰おうか」

魔術師 Differential ability (後書き)

明日は大会…

コレを書いているのは2:00…

大会には8:20集合…

これはしねる

というわけで、本題へ。

千夜自体、魔力を持っていないわけではありません。微量ながらも持っている、という感じです。

本当に魔力量が凄いのは焰薙の方ですのでwww

取り合えず3巻は強制介入しても何とかなるようにちょっとした話を入れないといけません…

アレイスターとの絡みって、難しいよねえ？

対決！Invisible trap（前書き）

電改なんだぜい

さすがに書いたんだぜい

今回は矛盾点多いかもしれないから、矛盾点あつたら「Twitter」に「報告をお願いします」。

対決〈Invisible trap〉

「炎よ——」
ステイルが呟く。

瞬間、オレンジのラインが爆ぜた。

咄嗟にそれを能力でガードしようとするが、ここでふと、気がついた。

——そもそも超能力で魔術に勝てるのか？

その疑問が解ける間も無く、炎剣を構えたステイルが千夜を横殴りに叩きつけた。

「少しばかりやりすぎたかな？」

ステイルは炎を見つめて、自身の勝利を確信——否、それよりもこの事が他の者に気づかれていないかを気にしていた。

そんな中千夜は炎を掻き分け、日本刀を構えつつ、反撃の機会を伺っていた。

だが

「——ッ！」

ステイルが突如その場から飛び退いた。

「まったく——これを喰らって生きているなんて、どんな術式を使っただんだい？」

——知られていた！？

これでは潜伏していても意味が無いので、炎より出でる。

「——ふむ。その刀は凄い礼装だね…それならばこの炎であっても斬ることができる。そういうことではないのかい？」

実際は違う。だが、口裏を合わせておいた方が有利であるので、ここは斬ったということにしておく。

「…そうだ」

ステイルは微笑を浮かべる。

「…なら、一気にやらせてもらおうとしようか！」

『魔女狩りの王』か！

そうはさせない。

その前にやる。

ではそのために必要な力は？

簡単だ。

目の前の敵を一撃で葬り去る破壊力。

それがこの焔薙にはできる。

——いくぞ！

オオオオ！という雄叫びと共にステイルへ突っ込む。

「おや、これを出すまでもなかったかな？」

千夜の行く手を阻むものがある。

それは——

「…『魔女狩りの王』か…」

「御名答…さすがに君でもこれは斬れないだろうしね」

—— 答えは…

「否だアアアアア！」

「ッ！」

ステイルはひどく驚いたようだ。

それもそうだろう。

自分の切り札が最もたやすく、そう、本体であるルーンのカードを切られたのだから。

「な——」

「…どうした魔術師」

ステイルは狼狽える。

「あ、ああ——」

自分の最後を覚悟しているのだろう。

—— そろそろ上条がやって来る頃だな

では、と思い、その場から去ろうとする。

瞬間、足から力が抜けた。

「何——」

だと？と言う前に千夜の意識は途切れた…

対決〈Invisible trap〉(後書き)

ちよつとした解説

千夜が倒れたのは始めて魔術を行使するのに大規模魔術をいきなり発動したので魔力切れ々みたいな感じですね。

新訳2が欲しい今日この頃である。

人間性 Misunderstanding (前書き)

どうも…電改突破というものです。

いい案がポンと出てきたので書いてみたいと思います…

人間性 Misunderstanding

「は、はは…」
ステイルは苦笑する。

…たいした事は無い。ならば何故あそこまで追い詰められる？
妙に引つかかる事はあるが、取り合えずはインデックスの回収を済ませようと、歩き出した時であった。

「おい」
と、声が聞こえてきたのだ。

ステイルはこの時まで、彼の存在を忘れていた。
そう。彼とは――

上条当馬である。

「な、なんの用だ!？」

ステイルの問いかけは簡単なものであった。

上条は即答する。

「決まってるんだろ…アイツを…インデックスを瀕死にした拳句、無関係な奴まで気絶させるなんて…」

ステイルは焦った。

…そうか！コイツは奴が魔術を使えることを知らないから奴を”ただの学園都市に住む学生”と思っっているわけか！

「何を言ってるんだい…彼女が傷ついたのは歩く教会が絶対防衛であるという前提から起きた事故で――」

上条はその言葉を受け、こう答えた

「だったら…神様は完全であるという前提から考えてみる…世界が

無くなっても完全であるという前提から起きた事故と言えるのか？」

ステイルはその問いに答えられなかった。

「炎よ——」

ステイルがそう呟くと上条は吠えた。

「なんだよ…言うだけ言っておいて都合が悪くなると力に頼る…魔術師ってのはそういうモンなのか！あア？」

…もはや切り札を出してでもコイツを仕留める……ッ！

そうした中で千夜は目を覚ました。

人間性 Misunderstanding (後書き)

終わりが適當すぎる…

そしてお決まりのキャラ崩壊…

どんどんと先が見えなくなっていく… 1巻すら無事に完結するかも
わからなくなってきた…

必勝戦略…？ H e w a s c l e v e r ? (前書き)

——更新が遅れて申し訳ありません。電改です。

詳しい話は後書きにてさせて頂きます。それでは本文をどうぞ。

必勝戦略…？ He was clever？

千夜は、動かぬ身体を無理矢理動かし…立った。
霞みがかつていた視界が晴れていき、状況を把握するべく脳が活動を再開する。

「まだ動けたと言うのか…！」
ステイルが炎剣を構えようとしたところで上条の右手に打ち消される。

「な…ッ」
ステイルの炎剣を打ち消した上条はまだ立っていることが不思議な
”一学生の”千夜にこう叫んだ。

「大丈夫か！？」

誰かに…心配されている…？

千夜は眼前にいる学生を上条当麻だとは思えなかった。思考が働かないのだ。

「あ、ああ…なんとか…」
言葉を紡ぐだけでも、気が狂いそうになる。

そんな状況で、ステイルは本来の目的”禁書目録の回収”を思い出し、彼女の元へ行こうとする。
だが、上条がそれを妨げる。

「…インデックスをどうする気だ？」
上条が言う。

「安心してくれ、少し預かるだけだよ」
ステイルが返す。

「理由はあるのか？」

上条が続けて問う。

「彼女は一年分の記憶しか持てない。彼女が10万3000冊を記憶している事は聞いているだろう？その10万3000冊が彼女の記憶領域を圧迫し過ぎているんだ。だから、僕達が記憶を消して、また生きられるようにする。それだけの事さ」

「つまり、俺と過ごした記憶も無くなるのか…」

上条は少し考える。

「待てよ！前に何かで”人は140年分の記憶ができる”と聞いた事がある！」

「…なあ」

上条は、苦笑しながら尋ねる。

「なんだい…今更返せっていうのかい？うん？」

ステイルはインデックスを抱えて、少し面倒そうに言う。

「インデックスが記憶してる10万3000冊の魔道書…それは記憶のどのくらいを圧迫してるんだ？」

上条は、魔術師が何を言おうと、これからする事は決めている。

「うん？85%だけど？」

「残りは15%…だったら…！」

「だったらよ…」

上条は、魔術師に、言い放つ。

「インデックスは…6歳か7歳で死ぬ事になっちまうぜ？」

必勝戦略…？ He was clever？ (後書き)

うわああああ！

話が滅茶苦茶になっていくううう！

電改です。

よく考えたらこれ、神裂さん出番無しになるね(笑)

ま、こつやってその場の気分で適当に書くから、更新が遅れるんだろつね

更新出来なかった事に理由はありません。単に遊んでいただけです。誤字脱字、この説明間違ってるよ！等ありましたら、感想にでもどつぞ。

真実を伝える人 She is destined to be kept (前)

ねーちゃんマジ出番無し。

電改です。

注意 この話では、独自の解釈を含んでおります。これが…禁書
目録かよおおおおおおオオオオオ！となるのが嫌な方は即座にブ
ラウザを閉じて戴くか、この小説を読む事をお止めになると宜しい
と思われませう。

では、それでも良い方は本文をお楽しみ下さい。

ステイルは一瞬驚いた表情をみせる。

そして、ステイルは言う。

「じゃあ、彼女は…」

上条が応じる。

「そつだ。…完全記憶能力つてのは例えばその辺に生えてる木の本数とか…そんなゴミ記憶すら忘れる事はできねえが、さっき言った通り、人間の脳の構造上、どれだけの記憶、どれだけの知識を覚えても『その記憶を墓まで持つてく』だけなんだ。つまり、インデックスの頭がパンクする事はあるしねえ…『誰かが細工をして』無理矢理脳をパンクさせるような事をしない限りな」

ステイルは思う。

彼女の脳に細工をして…一年置きに処理をしないと死ぬようにして…支配下に置くという寸法だったのか…

ふう。と一息ついた後、ステイルは、この男なら、彼女——インデックスを救う方法が分かるかもしれないと、期待をしつつ。

「なら、それを救う方法もあるんだよね？」

上条は答える。

「ああ。医学的に、ならな。だけど、魔術とかというのが関わってくるなら、お手あげだ」

千夜は、満身創痍の身体で状況を理解しようとした。

そして、気がついた。

ヨハネのペン

自動書記の事を知ってるのは…俺だけじゃないか…

ステイルは、やはりか…と呟くところ告げる。

「…もう待っている暇はないんだ。救う手段が無いなら…教会に頼るしか――」

そこで、ステイルの言葉を遮り、千夜は言う。

「…待ちな…方法なら…ある…」

上条はバツ、と振り返り、千夜に駆け寄る。

「喋って大丈夫か!？」

千夜は答える。

「ああ…それよりも、インデックスを縛っている魔術の正体…それを…俺は知っている…」

何!?!とステイルが言うと同時に千夜は言葉を紡ぐ。

「その魔術の正体は…ヨハネのペン自動書記だ…!!」

真実を伝える人 She is destined to be kept (後

書き直すと展開が全然違ってくるネ

電改です。(二回目)

今回も神裂ねーちゃん出番無し。

これはもう出ないでしょwwwまあ、強い要望があれば出番検討してみます。

では、この辺でキーボードを打つ手を休ませていただきます。

今回執筆での使用BGMは東方紅魔郷より1、3、6bossテーマとなっておりませぬ。気になった方は調べてみるのもいいかもしれませぬ。

誤字脱字、この説明間違ってるよ！等ありましたらお知らせ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1999u/>

とある異聞と銃器製造(ガンメイカー)

2011年12月24日01時48分発行